

51 WAIS-Ⅲにおける外傷性脳損傷者の認知的特徴

リハビリテーション部 臨床心理 色井香織 有馬早苗

理療教育・就労支援部 就労移行支援課 就労相談室 四ノ宮美恵子

【目的】

外傷性脳損傷後の神経心理学的検査としては、ウェクスラー知能検査が最もよく利用されている。2006年には、日本においてもWAIS-RからWAIS-Ⅲに改訂され、IQという概念のほかに、新たに「言語理解」「知覚統合」「作動記憶」「処理速度」という4つの群指数の概念が加えられた。原版テクニカルマニュアルでは、中等度から重度の閉鎖性頭部外傷者22名のWAIS-Ⅲ実施結果について報告されている。そこで本研究では、サンプル数を増やした上で、日本版でも原版と同様の結果が得られるのか検証し、外傷性脳損傷者の認知的特徴について考察することを目的とする。

【方法】

国立障害者リハビリテーションセンター病院の入院・外来患者で、外傷性脳損傷後の高次脳機能障害と診断された計80名（男性62名、女性18名）を対象とし、WAIS-Ⅲの実施結果について分析を行った。平均年齢は、43.26±16.63歳（range:16-77歳）、受傷から検査実施までの平均経過期間は83.15±60.01日（range:11-299日）であった。ただし、画像所見がなく受傷の機序が不明である、明らかな失語症が認められる、WAIS-Ⅲ施行上支障となるような麻痺がある、精神疾患等の既往がある、受傷から1年以上経過している場合は除外した。

【結果】

WAIS-ⅢのIQ及び群指数の平均値・標準偏差は、表1に示した。t検定の結果、PIQ平均はVIQ平均よりも有意に低かった（ $t(79)=2.86, p<.01$ ）。分散分析を行ったところ、群指数間にも有意差がみられ（ $F(3,237)=30.48, p<.001$ ）、多重比較の結果、「処理速度」平均は他のいずれの群指数よりも有意に低かった（ $p<.001$ ）。

【考察】

原版ではPIQがVIQを下回る結果であったものの有意差はみられなかったのに対し、本調査においては1%水準で有意差が認められた。また、本調査におけるVIQ、PIQ、FIQ平均がいずれも原版データよりも低スコアであったが、これは本調査対象者の検査実施時期が原版の対象者よりも受傷からより早期であったためと考えられた。また、群指数に関しては、「処理速度」のみが他の群指数と比較して有意に低いという結果が得られ、外傷性脳損傷者の場合、認知機能の中でも「処理速度」への影響が特に大きいという原版の結論が支持された。

今後、さらに検査実施時期や重症度を統制した上で、統計的な検証をすすめていくことが課題である。

表1 WAIS-ⅢのIQ及び群指数の平均値・標準偏差

| | | n | 平均値 | 標準偏差 |
|-----|------|----|-------|-------|
| IQ | VIQ | 80 | 84.65 | 17.64 |
| | PIQ | 80 | 80.15 | 19.72 |
| | FIQ | 80 | 80.94 | 18.88 |
| 群指数 | 言語理解 | 80 | 84.55 | 17.18 |
| | 知覚統合 | 80 | 86.22 | 20.01 |
| | 作動記憶 | 80 | 86.14 | 19.09 |
| | 処理速度 | 80 | 72.03 | 18.25 |